

✿ 奈良・興福寺の明治維新

歴史研究室では東大寺の古文書を調査しています。そのなかに、明治維新の時の日記を見つけました。興福寺で実務を担当する承仕じょうじという役職にいた、中村宗円という人の日記です。明治維新で還俗して興福寺を離れ、その後、ご子孫が史料を東大寺に寄贈したために、いま東大寺に残っているのです。

慶応4年(明治元年、1868)の日記からいくつか拾ってみます。1月3日に京都出張を命じられますが、途中の伏見で、旧幕府側と維新側との軍勢がにらみ合っ
て物々しい空気。なんとか京都に着いたら、伏見で戦争になり、京都も大騒ぎに。鳥羽・伏見の戦いに偶然遭遇したのです。10日に奈良に還ってくると、維新側の十津川郷士が奈良を占領していました。2月7日には大和国鎮撫総督ちんぶそうとくや諸藩の軍勢が奈良に到着。彼らの宿所を興福寺が提供するので、実務方は大忙し。そんな中、3月17日には、神仏混淆こんこうあいならずとのことで、興福寺上層部が対応に苦慮している様子。4月7日には、上層部は還俗するので、承仕たちも還俗するのかどうか、夕方までに返答せよとの命。「歎なげヶ敷事かき、古今未曾有之珍事也」とは思っても、事ここに至って「彼かれレ是申上候迄しあげそうろうまでも無之次第これなきしだい第二付」、還俗することに。名も、宗円ではなく男也と改名。それからは春日大社しんしんしの新神司という立場に。しかし7月からは個人的に見込まれて、発足早々の奈良県に出仕、と、激変する情勢を記しています。またその中で冷静に仕事をこなしている点に、筆者の人格が偲おもげられます。

明治維新时期の奈良は、混乱期なので、公文書はあまり残っていません。この日記は、当事者の声を伝える貴重な記録です。(文化遺産部 吉川 聡)



鳥羽・伏見の戦いの時の日記(慶応4年1月3日)